

『いとし児』一九六六年九月（日本両親再教育協会）

社会科の基礎能力

矢口 新



最近の教科書から

私たちは子どもが学校で勉強する場合を考えると、教科書を読んでよくおぼえてくればそれが勉強になるのだというように考えている。先生の話をよく聞いてわからなくてはならない、わかったことをおぼえなくてはならない、それをするのが学校での勉強だというように考えている。

そこで今ある教科書の三年生の教科書、開巻第一頁を見てみる。「市のようす」という題が出ていて、見出しが「ようすしらべ」ということになっている。そして文章がはじまる。その文章は、「わたしたちの組では市のようすをしらべることになりました。わたしたちの市には、七万人ほどの人がすんでいます。云々」となっている。この次の文章は省略して、次の見出し、「学校の南がわ」をすこし紹介してみる。「学

校の南がわには、東から西へ、ひろいバス道おりがとおっています。この道を西へいくと、鉄道のふみきりがあります。云々」となつて学校の周囲の説明である。

次の見出しは、「絵地図づくり」となつていて、文章が「先生が、絵地図にかいてみましよう、ようすがよくわかりますとおしえてくださいました。わたしたちは、絵地図をかく紙を、教室のゆかの上にひろげました。先生が、『絵地図や地図をかくときは、上のほうを北にするのですよ』とおしえてくださいました。云々」となつてい

る。次の見出し、「先生の地図」には、「わたしたちがかいた絵地図をもとにして、先生が地図をかいてくださいました。絵地図と先生のかいた地図とをくらべて、地図のかきかたを話しあいました。道は、絵地図とおなじようにかいてあります。云々」となつてい

次の見出しは「駅のまわり」となつていて、「わたしたちは、つぎに、駅のまわりと駅まへのとおりのようすをしらべました。学校の西にあるふみきりをわたつて北へまがると、店がたくさんならんでいるにぎやかなとおりに出ます。云々」となつてい

る。右に紹介した部分は、市のようすという題で、ある学校のまわりのようすを叙述してある。その叙述は子どもたちが学校で勉強のときに市のようすをしらべようということになり絵地図をかき、地図をみながらしらべて行った結果を述べたという形式になつてい

る。このような教科書を使って子どもは勉強しているのだが、親たちが子どもによく勉強して、よく先生の話聞いて、本を読んで、よくおぼえなさいなどという時、一体具体的には何を要求しているのだろうか。おそらく極めてぼんやりしたことしか考えていないのではないか。たとえば右にあげた教科書の例でみると、何をおぼえることになるのか、先生の話聞いてわかることは何がわかればよいのかというように考えているのだろうか。これは言いかえれば、親は社会科を子どもに勉強させることによつて、どんな能力がつけばよいと考えているかということがある。

大切なのは暗記ではない

親はよくおぼえなさいなどという言葉を使うが、前に述べた教科書の例のような文章をそのままおぼえてみても仕方がないことはすぐ気がつくであろう。この教材(右に述べた教科書の中味として書かれてあることがら)は、これを読む子どもが自分で自分の住んでいる地域を、しらべてそれを述べることができるようになるためのヒントが出ているものだというように考えられる。この文章の作者はどんな風にして自分の住んでいる市をしらべていったのかを読んで、自分もそのようにしてやってみて、そのしらべる活動をやることによって、しらべることができると獲得するようになることをねらって、この文が書かれてあるようによい。

「ようすしらべ」という見出しはつまり序論の部分で、住んでいる所が市であることが述べられ、「学校の南がわ」では、学校の近所の地理の説明である。つまり学校の南側という地域を述べたのであるが、それはどのように見るかという見方を教える教材だとみることができ。次は「絵地図づくり」という見出しで、絵地図をみんなで作ったことが書かれてあるが、読む子どもにとっては、自分たちもそれを

つくってみようという動機づけになるものである。またこの文の下にはその絵地図がさし絵になって入っているから、地図の読み方も訓練する教材であるといえよう。次の見出しが、「駅のまわり」となっていて、地図を見ながら叙述した形になっているが、いわば地域を見てゆくための参考の材料があるといえよであろう。

このように見てくると、ここにあげられた教科書の中味は、ただそれをおぼえるためのものでなく、むしろ勉強する子どもの動機づけをして、ぼくもやってみようと思わせるもので、自分でやって身につけることが、あらかじめ考えられている。たとえば絵地図をかいみようとせば、教科書の例にならって自分の学校のまわりの所をかくことができるわけである。それによって、上をどの方角にするか、道をどう描くかなどということを工夫させられる。そこで子どもの能力をのばそうとするわけである。

戦争前の学校で教育を受けた人たちは、こういう教科書ではなかった。それこそ暗記しておぼえる式の文章であった。たとえば昔の地理などと比べるとよくわかる。「東北地方には中央に奥羽山脈が走っている。川は日本海がわに○〇川、××川、太平洋がわに△△川」などと書いてある。これをおぼえろといえよ一生懸命暗記するというのが普通であった。しかし今の教

科書はそういうものではないことは前に述べた通りである。では一体勉強することによって身につくものは何であろうか。

「社会を正しく見る」能力

昔の教科書は、暗記式におぼえることが書いてあった。おぼえることがあって、それをおぼえれば勉強したことになる。おぼえたことはいつかは役に立つときがあると考えていた。今の教科書にはおぼえることが、昔のような形で書いてあるのではない。それを参考にして自分でやってみておぼえるのである。おぼえることは、考え方だったり、しらべ方だったりであって、つまり行動の仕方とでもいったらよいかもしれない。たとえば自分の市には何々という町があるということや人を人から教えてもらうのではなく、自分の市では何という町があるのか、それはどこがにぎやかなのか、それは学校からどのような方角なのかなどというものを地図をみて考えたり、しらべたりすることができるということをねらっているのである。つまり一つの地域を自分で見ることができ、自分でつかむことができるというように言ってもよい。

社会科がねらっている能力についてなかなか正しい理解が得られないのは右のような点である。昔流のなにかをおぼえるというのでな

く、社会を正しく見ていく力をつけるのである。子どもが学校のまわりの土地のようすをしらべるのは、その土地になにかがあるかをおぼえるのではなく、どこの土地へ行っても、ここはどのような地域かと自分で把握できるようにすることである。

教科書に書かれてあることをおぼえる式の勉強では、机の前にすわって言葉だけを暗記しておればよいことになるが、本当に**社会を見る**ことができるようになるには、自分で町の中を歩いてみる必要はないし、それを地図にあらわしてみることも必要だし、というようにいろいろな能力が養われなくてはならぬ。社会科とはそういう能力を養うことが目的なのである。一言にして言えば、**社会科とは、社会を正しく見ることが、できる能力を養う教科**だといつてよいであろう。

正しいというのは、科学的というように言うてよいであろう。科学的、合理的にものをみるといふようなことは、現代生活にとっては誰にでも必要なことであるが、社会、世の中というものについて、そういう科学的、合理的な見方がなければ、これからの社会は社会として維持できないであろうし、個人としてもやっていけないであろう。わが国がこれからの世界の中で生きていくためには、科学的に社会をみる力は絶対

に必要な能力であるといわなくてはならない。

「自分で」といふこと

社会科の勉強は、ただ教科書を読んでその言葉をおぼえていくなどということではだめである。自分で社会というものにぶつかって行って、それを自分で解釈することが必要である。ということはどういうことかとというと、例えば「日本の農業は米づくり農業である」と教科書に書いてあるのをおぼえるのではなく、そういうことが言えるには、何か根拠がある筈である。つまりここでは農産物の統計といったものがあるが、それを見ると、米が非常に多い、農業生産の大部分を占めている。一軒の農家の収入をみてもそうだ。つまり日本の農業は米づくり農業だといったような考える道すじがある。この道すじをたどることが大切な勉強なのである。つまりここで言えば、統計資料をみて、それを解釈するという道すじである。資料というのは、社会というものの実際の姿を何等かの方法であらわしたものである。そういうものを使って社会を見ているわけである。これが直接社会にぶつかってということになるわけである。正しく社会の姿を表現するにはどういう風にするかも考えなくてはならないし、それを正しく解釈する筋道も考えなくてはならぬ。こう

して自分で正しく考えることから、今の社会がどういう姿であるか、どこに問題があるかも自分でつかめるのである。人が言ったのを聞いているのではなく、自分で正しくつかむことができるようになる。それが、社会をよりよく発展させようとするモラルもそだてるのである。ここに問題があると自分で苦労してつかむことが、それを解決しようという努力を生み出すことになる。ただ耳で聞いたり、教科書にあることをよんだり、ちよつと聞きかじったということでは、本当に社会をみて、社会のことを考えていることではない。そういうのは、物知りであるかもしれないが、無責任な人になるのである。つまり、自分の目でみて、自分で確かめて社会のことを考えていくということがないからである。

家庭で子供と話をするというようなときにも親が、そういう実証的、科学的な態度で社会のことを子供と話し合うというようなことは、子供に本当に社会を見る目を養わせることになる。しかし日本の家庭は一般にそういう点で極めて能力が低い。つまり親にそういう態度がないのである。それが結局は日本の社会を住みよい社会にすることにマイナスに働いていることを思わねばならない。

(生産性本部プログラム研究所長)